



毎月1回、ページ担当をして広報の音訳をする桑野さん(左)と木村さん(右)。朗読の先生を招いての勉強会を毎月行い、音訳技術向上のために学習を重ねています。

GROUP NAME
「福智町朗読ボランティア 青い鳥」

視覚障がい者へ情報を正確に伝える。幸せの、青い鳥

目が不自由な人のための、広報「ふくち」を作ること。それが、青い鳥の活動の一つです。数十分、黙読できる広報紙も、表や写真の説明を詳細に入れながら隅から隅



現在、町内8件に会員が直接CDをお届けしています。手渡したときの「ありがとう」という言葉と笑顔が、何よりの励みになるそうです。

まで聞き取りやすいテンポで音訳すると、それは3時間にもなりません。「文や写真を実際に目で見て理解するよりも、耳で聞いただけで判断するほうが数倍難しいものです。まずは自分が理解し、どうしたら正確に分かりやすく伝わるかを常に考えています」と桑野京子さん(市場)。桑野さんは視覚障がい者体験にも参加し、目が不自由な人の気持ちに近づくと努力もされたそうです。そんな聴く人への配慮が行き届いた、音訳版広報「ふくち」は、木村元子さん(赤池)と2人がかりで1週間かけて録音され、CDに複製されています。青い鳥の声によって町の「いま」と情景が手から手へ伝わっています。



「絵本は子育てのパートナーだということを、親にはぜひ知ってもらいたいですね。ご自宅に2500冊を所有する岸谷さん(写真右)。ブックスタートで「はい、アーン」。

GROUP NAME
「絵本を読む会 ぶらんこ」

“人の心をはぐくみたいそれが一番の願いです。”

「心を揺り動かしたいという思いから、「ぶらんこ」と名付けました」と団体名の由来を語る岸谷元美さん(赤池)。その経験から、絵本は人の心を育てると痛感したそうです。



学童クラブ「かえるの学校」で岸谷さんの読み聞かせに集中した表情を見せる子どもたち。この「聞く力」が「考える力」をはぐくんでいきます。

絵本にはいいわけはないや仲間良くないか」とは一言も書かれていなくても、読み終えると誰もが自然とそのメッセージを感じ取るのだといいます。人に言われると素直に聞けなくても、絵本からのメッセージはすっと入ってくるので自分の心で考えられるのです。「わたしも絵本のメッセージを感じて反省させられる時があります。絵本は子どもだけのものではないんですよ」と岸谷さん。現在、乳児に対するブックスタート事業の支援のほか、小学校や高齢者大学にも出向いて絵本の読み聞かせを行う多忙な日々を送っています。絵本で心の琴線を揺らしている「ぶらんこ」のみさんです。



金田手話の会ではテキストで勉強した単語を使いながら、聴覚障がい者と直接会話し、交流を深めながら技術を高めています。「覚えた単語の数が増えてくると楽しいですよ」と河西さん(写真左)。

継続こそ一番の力だと信じて26年。

現在町内には3つの手話の会があり、中でも、金田手話の会は昭和56年から活動する歴史あるグループです。「手話は言葉なので、繰り返し使わないとなかなか覚えられません」と河西秀美さん(金田)。会員が集まらず一人で勉強した時もありましたが、絶やさず一人で継続し、今は週1回のメンバーとの交流を楽しんでいます。「聴覚障がい者が困ったとき、手話ができる人がいたらとても心強いんです。どこの職場でも手話が必要と言葉。手話技術を持つ人がもっと増えてほしいですね。知りたい、伝えたい、という気持ちを大切にしている河西さんです。」

GROUP NAME
「金田手話の会」



地域のかたと協力するこのぼりの収集や掲揚作業は、今年で9回目を迎えました。河川勉強会で自ら講義する大久保さん。美しい彦山川の将来を担う子どもたちに、河川美化への意識と活動を広げています。

GROUP NAME
「ひこさんがわ夢の会」



毎年4月中旬から上野橋付近の彦山川河川敷を泳ぐ、約100匹のこのぼり。春の風物詩となっており、上野焼「春の陶器まつり」の来客者も色鮮やかに迎えています。

“ふるさとの川を愛す”ボランティアで広がる心の輪。

平成15年に県河川協会、平成18年には日本河川協会の功労者表彰を受賞し、今年6月に「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰を受賞した町内最大のボランティアグループ、「ひこさんがわ夢の会」。大久保麻里さん(赤池)が10年前に彦山川河川敷の清掃活動を始めたことが発達のきっかけです。「最初は2人でごみ拾いを始めましたが、何度拾っても、次回にはまたごみが落ちていました。彦山川の水で生活していることをもっと認識して欲しいと思いましたね。」大久保さんは、ごみの多さを目の当たりにすれば「ごみ問題に関心を持つ人も増えるのではと考え、河川敷でのコンサートやお茶会を開催。会員数は瞬く間に増え、現在76人を数えます。活動は10年前と同じく河川敷清掃がメイン。月1回の清掃では、毎回約2トンものごみが回収されるそうです。「地域社会に貢献したい気持ちを持つ人が集まり、今では会員同士のふれあいの場にもなっています。一人暮らしの高齢者に、夢の会は癒されるよ」と言ってもらえたときは幸せを感じました」と大久保さん。川を愛する熱い思いを子どもも大人まで広めた夢の会は、いま人と人との心の輪も広がっています。